日文教授用資料［中学校美術］

美術教師ハンドブック

日文のWebサイト

日文

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

心が動く、その先へ。
日本文教出版

はじめに

明るい未来を拓くのは子どもたちです。

美術の学習では、明るい未来を創造していくために大切なこととたくさん関わります。

その美術の時間が子どもたちにとって学びの多い充実した時間であるために、そして私たち教師がそうした意識をもったよりよい美術の教師であるために、心に留めておきたいことをここにまとめました。

目次

はじめに……1

第 1 章　生徒理解

1　生徒の興味・関心を知ろう……4
2　生徒が育ってきた背景を知ろう……5
3　多種多様な表現を受け入れよう……6
4　授業では一人一人の様子を観察しよう……7
5　授業後に記録を付けよう……8

第 2 章　題材や授業のデザイン

1　3 年間を見通した年間学習計画を立てよう……10
2　表現と鑑賞の関連を図ろう……11
3　題材で身に付けさせたい力を考えよう……12
4　導入を工夫しよう……13
5　『造形的な視点』で捉える場面を設定しよう……14
6　選択の幅を増やし、自己決定する場面を設定しよう……15
7　板書や提示資料を工夫しよう……16
8　生徒の意欲を引き出す資料を準備しよう……17
9　素材に触れて試す機会をつくろう……18

第 3 章　美術を通して育む“心”

1　授業の開始、終了時刻を守ろう……20
2　準備や片付けのルールを決めよう……21
3　意見を交わしやすい雰囲気をつくろう……22
4　「うまくいかない」をチャンスと捉えよう……23
5　作品を大切にしよう……24

第 4 章　環境整備・教材研究

1　美術室の環境を整えよう……26
2　校舎内に作品を展示しよう……27
3　校外にも積極的に展示しよう……28
4　自分の引き出しを増やそう……29

教科の目標、各学年の目標及び内容の系統表（中学校美術）

教科の目標、各学年の目標及び内容と各学年の内容の取扱い……30
指導計画の作成と内容の取扱い……32

おわりに……33

第 1 章

生徒理解

答えがなく、自分の内面を豊かに表現することが求められる美術の時間は、生徒にとっては不安や迷いがあり、自信のなさにつながりやすいものです。

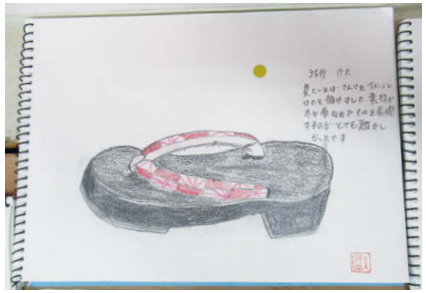
教師が生徒に温かなまなざしを向け、そうした気持ちを理解しようとする姿勢があれば、生徒は心を開き安心して豊かな創造活動に向かっていくことができます。そして、より適切で効果的な学びを生み出すことにつながります。

1 生徒の興味・関心を知ろう

生徒を美術の授業に引き付けるヒントは、普段の何気ない会話やつぶやき、学校生活以外にたくさんあります。アンテナを高くして生徒の様子を観察したり、好きな絵を描かせるなどして情報を集めたりすることで、今、生徒が何に興味・関心があるのかを知ることができます。

それによって、集めた情報から題材と関連する内容を資料として提示したり、表現方法に取り入れたり、タイミングのよい学習時期を考えたりするなどの工夫ができ、生徒の学習意欲につなげることができます。

手立て例：「美術でノート」
生徒が自由に描いて授業のある日に提出するノート。描かれているものから生徒の興味や関心を知ることができる。



夏祭りに浴衣を着て出かけた様子が分かる。木や紐の質感の表現を追求したいという生徒の感想から、表現の工夫について授業で取り上げ、学びを深められるようにした。

心の様子を形や色彩で表している生徒がいた。そこで、授業でもそれらが感情にもたらす効果について触れ、学びを深められるようにした。

2 生徒が育ってきた背景を知ろう

生徒について、その取り巻く背景に注目しましょう。どんな地域で育ってきたか。住んでいる環境はどんな様子か。小学校の図工の時間にはどんな学習をしてどんな力を身に付けてきたのか。中学校の学級や学年の特徴も確認しましょう。

生徒の背景を押さえながら学習を進めることで、生徒の学びやすさを助けることができます。また、生徒の身近なものや地域の伝統的なものを表現の材料や題材に取り入れることもでき、学びを深め、学習を通して郷土への愛情を育てることにもつながります。

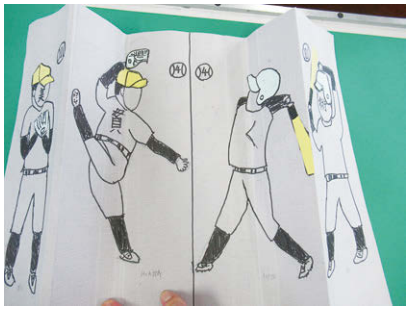
生徒の通学路なども確認してみる。

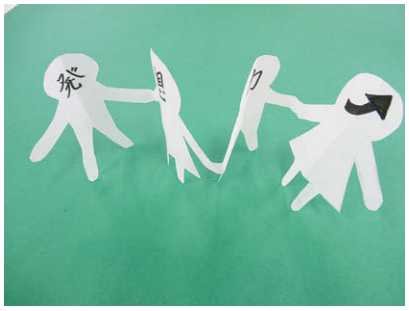
いろいろな方向から見る学校の様子も題材のヒントになる。

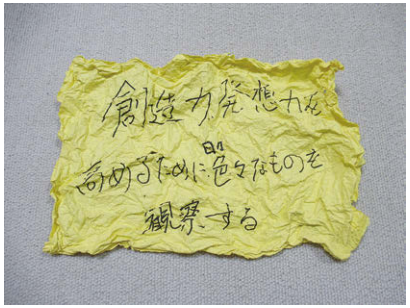
3 多種多様な表現を受け入れよう

出来上がりの形がほとんど一緒で、制作手順を指導するだけの単なる「作業」という授業では、生徒の発想力や創造力を伸ばすことにはなりません。

「題材を通して育てたい資質・能力を押さえていれば、生徒によって使う材料や表現方法が違ってもかまわない」という広い心で取り組ませることが大切です。主題を生み出す力や見通しをもって表す力などを育てるという視点で、生徒の多種多様な表現を受け入れましょう。







3年生のオリエンテーションで行った、今年の美術の時間の目標や高めたい力を「紙の特徴を使って伝えよう」という題材の作品。紙質の異なる約20種類の紙を準備することで、多様な表現が生まれるようにした。

4 授業では一人一人の様子を観察しよう

一斉授業においては教師が授業の流れに集中してしまい、個々の生徒の様子を見落としてしまうこともあるかもしれません。しかし、学習過程を見取るためには、授業の中で全ての生徒の様子を観察する必要があります。生徒の思いを確認する工夫をしましょう。

例えば、制作中に一人一人に声をかけ、よい点を褒めながら構想や制作状況を確認したり、「振り返りシート」に学習の振り返りや困っていることなどを記入させたりして生徒の様子を観察しましょう。

美術室に入室してきたときの生徒の雰囲気も観察する。

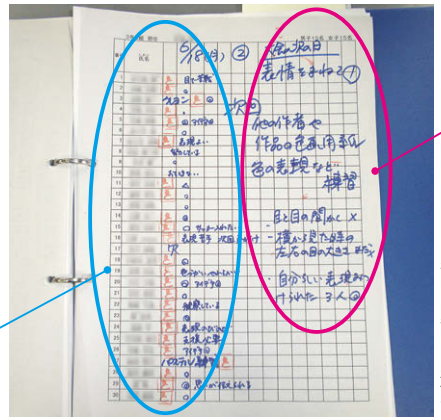
悩んでいる生徒には、必要な手立てをアドバイスする。

生徒一人一人の名前を呼びながら話しかけることで、生徒の思いを聞き出しやすくなる。

5

授業後に記録を付けよう

授業の後に、生徒が学習目標に到達していたか、意欲的に取り組めていたか、つまずきはなかったかなどについて記録を付けましょう。印刷した名簿やタブレットを活用すると便利です。完成作品だけで評価するのではなく、発想や構想の段階や学びの調整をしているかなどを見取ることに役立ちます。また、生徒の様子から授業者の振り返りも行い、次時に生かすことができます。



年度の初めにクラス名簿をたくさん印刷しておく。毎時間一枚に生徒を観察した記録と自分の授業の進め方の振り返りを記入する。

毎時間、授業の終わりに作品の画像をＰＣやタブレットで撮影させ、題材の終わりに画像を全部提出させる。こうすることで学びの過程を生徒自身も授業者も確認することができる。

第２章

題材や授業のデザイン

一つ一つの題材や授業の中で、美術の資質・能力は育まれます。どのようにして題材や授業をつくりあげていくのか、ここではいろいろな視点で具体的な例を挙げながら紹介します。

1 3年間を見通した年間学習計画を立てよう

美術科で身に付けさせたい資質・能力を学習指導要領で確認し、生徒の発達段階に合わせて年間学習計画を立てましょう。また、系統的に育てたい力については、学年に合わせたねらいを定めて、3年間を見通した学習計画を立てることも大切です。さらに、複数の指導者で授業に当たるときは、事前に題材や学年ごとのねらいや学習内容について十分に共通理解を図っておくことが大切です。

3年間を通して風景画制作を行う場合のテーマ設定例

1年生
「たくさんの感覚を使って、対象をじっくり観察しながら描く力」を育てるために「木のある美しい公園を描く」というテーマで取り組ませた。

2年生
「空間の広がりを意識しながら描く力」を育てるために「奥行きのある風景を描く」というテーマで取り組ませた。

3年生
「光や陰影による印象を捉えながら描く力」を育てるために「光とかげの追究」というテーマで取り組ませた。

※3作品は、全て同じ生徒が描いた作品です。

2 表現と鑑賞の関連を図ろう

鑑賞の学習は十分な授業時数の下で行います。また、表現と関連付けながら学習の充実を図ることも大切です。表現のための参考資料として作品を鑑賞するだけでは「表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実」とは言えないでしょう。

鑑賞作品に深く関わった表現活動があり、表現を通して改めて作品を深く感じ取れるような学習を行うことで、表現と鑑賞の学びが相互に深められます。

実践例：漆を使った絵暦制作
学校独自の絵暦（文字を使わず絵のみで表す暦）を学年全員で共同制作する題材。暦は郷土に伝わる「浄法寺塗」という漆器を参考に、漆で仕上げる。

鑑賞

漆器に触れる
実物に触れることで、職人の技や造形の要素の働きを直に感じることができる。

完成作品：下中絵暦

表現

漆を塗る
自分でも漆を塗ってみることで、漆を扱う難しさなどを実感し、より漆器のよさや美しさに気付けるようになる。

3 題材で身に付けさせたい力を考えよう

題材は「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の３つの観点で目標があり同時に評価をしますが、題材によって身に付けさせたい資質・能力を明確することが大切です。

例えば、同じ彩色表現をする題材であっても、活動内容が異なればおのずと身に付けさせたい技能も変わってきます。また、題材のどの部分で何を見取るのか、学習に取り組ませる前に題材の構想案を明確にしておくことも大切です。

例：彩色表現をする題材のねらいの違い

風景画

風景画では、自分が感じ取った風景のよさや美しさを表す。そのため、ここでは透明でにじみやぼかしが可能な水彩絵の具の生かし方を身に付け、工夫して表すことがねらい。

マークデザイン

マークは、見た人に瞬時に情報が伝わる必要がある。そのため、ここでは不透明でムラなく塗れるポスターカラーの生かし方を身に付け、工夫して表すことがねらい。

4 導入を工夫しよう

生徒と題材との出会わせ方を大切に考えましょう。題材の初めに生徒が学習に取り組む意義を捉えやすくなります。そのためには題材のねらいを明確にすることや、題材の魅力を教師自身が感じて生徒に示すことが大切です。

このように、題材の初めや学習内容のまとまりごとの導入を工夫することで、生徒の学習意欲を高めることにつながります。導入ではどんな工夫をしたらよいか、生徒の目線になって考えてみましょう。

「校内の問題を解決するマークデザイン」の導入の工夫

工夫①

解決する問題を生徒に考えさせる

生徒自身が解決すべき問題を考えることで学習に取り組む意義を捉えやすくなる。

校内にどんなマークがあるとよいか、みんなで考えている様子。

工夫②

校内で使うマークを全校生徒で決めることを提案する

デザインしたものが実際に活用されると意識することで、学習意欲が高まる。

実際に活用されたマーク。

活用したいマークを選んでいる様子。

5 『造形的な視点』で捉える場面を設定しよう

美術科の学習では、いずれの題材においても「造形的な見方・考え方」を働かせて学習することが求められます。

「造形的な見方・考え方」とは、感性や創造力を働かせ、対象や事象を、『造形的な視点』で捉え、自分としての意味や価値をつくり出すことです。『造形的な視点』とは、形や色彩、材料や光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを捉える視点（木を見る視点）と対象のイメージを捉える視点（森を見る視点）のことです。

題材のどの場面でどのような『造形的な視点』で捉えさせるか、題材構想の段階で考えておくことが大切です。

『造形的な視点』で捉えさせる場面（なりきりロゴデザインの場合）

「なりきりロゴデザイン」は、身の回りにあるロゴに自分の名前を入れるという題材。

実際のロゴ

生徒作品

場面① 身の回りにあるロゴを鑑賞するとき

パッケージのロゴからどんな印象が感じ取れるかを、商品との関係などから、全体のイメージで捉えさえる（森を見る視点）。

文字の丸みと赤い色によって、カーブした甘辛い柿の種という感じがする！

場面② 自分の名前をロゴそっくりに描くとき

自分の名前をロゴそっくりに描くにあたり、見本とするロゴの文字の特徴を形や色彩で具体的に捉えさせる（木を見る視点）。

黒い影があることで、文字が立体的に見える！

6 選択の幅を増やし、自己決定する場面を設定しよう

題材の展開の中で、主題や表現方法、モチーフ、材料、画材などを学習のねらいに合わせて生徒が自由に選択できる場面をつくりましょう。それを積み重ねていくことで、生徒の主体的な学びを導くことができるとともに自己決定する力を伸ばすことが期待されます。また、自分で選択し表現する活動を通して「自分らしさ」に気付かせることにもなります。

画材や画用紙、表現方法などを選択させて取り組ませた「自分を見つめる自画像」。

7 板書や提示資料を工夫しよう

板書は、学習内容や学習の流れが分かりやすいように計画的に示しましょう。

題材名や学習目標は常に同じ場所に示し、授業の流れや手順などの見通しも示しましょう。資料はスクリーンや TV なども活用して生徒に分かりやすく提示します。ただし、参考資料を多く見せることがよいとは限りません。多すぎることで生徒の新しい発見やアイデアの広がりをなくしてしまうこともあるので注意しましょう。

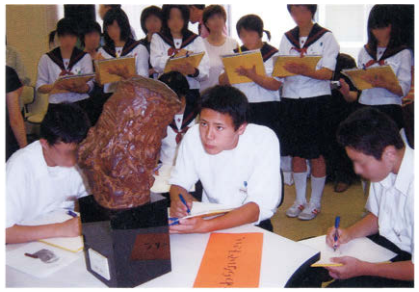
板書は、学習内容や学習の流れを分かりやすく示す。

題材名や学習目標は常に同じ場所に示す。

8 生徒の意欲を引き出す資料を準備しよう

生徒の興味や関心を引き出す資料を準備しましょう。特に鑑賞学習では本物や本物と同じ大きさのもの、美術館や博物館などから借りた資料など、より実物に近いものを提示してその作品の世界観を味わわせましょう。また、他教科の教科書や総合的な学習の時間の資料などを活用することで学びを深めることができます。

作品を実物サイズに拡大する。



本物の彫像を鑑賞させる。

復興教育副読本『いきる　かかわる　そなえる』を活用して復興マークを制作する。

タブレットを活用して部分を拡大しながら鑑賞する。

9 素材に触れて試す機会をつくろう

いろいろな素材に触れたり、試しながら表現方法を考えたりする学習を取り入れましょう。小学校では「造形遊び」が位置付けられていますが、中学校であっても模索しながら学ぶ経験をすることは、創造活動の楽しさを実感させることにつながります。

完成作品の質を求めるだけでなく、制作過程の思考や表現の段階を大切にすることで、思いの込められたよい作品が生み出されることが期待されます。

パステルやカラーペン、色鉛筆などを使って自分の表したい思いにぴったりの画材を探している。

粘土に絵の具を混ぜて試作。集中して思わず立ち上がって表現中！

第3章

美術を通して育む“心”

美術の授業は“心”を大切にする時間です。

表現する心、味わう心、発想する心、自分や、他人を見つめ大切にする心……。こうした豊かな心が美術科の資質・能力を育みます。また、美術の学習を通して育まれる“心”もあります。

ここでは、“心”を育てるために意識したいことを紹介します。

1 授業の開始、終了時刻を守ろう

50分間の授業時間を有効に使いましょう。授業で使う道具の確認など、効率よく短時間で準備させるために、生徒が入室してから席に着くまでの動線を工夫しましょう。また、開始や終了の時刻を守り、生徒が活動する時間を十分に取っておきます。片付けが終了した人から「振り返りシート」を記入するなどの約束をしておくとよいでしょう。

授業時間を有効に使うためには、準備や片付けを含めた時間配分の計画が大切です。また、始まりや終わりの挨拶をしっかり行い、時間を大切にする心を育てます。

授業の始めと終わりは元気よく挨拶をする。

2 準備や片付けのルールを決めよう

授業で使用する道具は、入室してすぐに分かるようにいつも同じ場所に表示しておきましょう。

道具は使いやすいように整理整頓しておきます。みんなで使う道具については、形や特徴が一目で分かるように色分けして示します。それによって準備や片付けがしやすくなります。さらに、同じサイズの箱に入れると、回収した個数も分かりやすくなります。道具の準備や片付けを通して物を大切に扱う心を育てます。

美術室に入室してすぐに「使用する道具」が分かるようにいつも同じ場所に示す。

みんなで使う道具は、色分けして示すことで、準備や片付けがしやすくなる。

3

意見を交わしやすい雰囲気をつくろう

生徒が自分の思いを自由に表現したり、自他の作品について安心して話し合ったりできる環境をつくることが何より大切です。

表現が得意な生徒もそうでない生徒も、生き生きと授業に参加させるためには、生徒の表現や発言を常に観察しながらその様子を認め、褒める姿勢が大切です。そして、明るく楽しい雰囲気をつくりましょう。

こうした授業を通して、お互いを認め、仲間を大切にする心を育てます。

互いの作品を見せ合いアドバイスし合える雰囲気を、１年生の初めから習慣付けることで、自然な学び合いができるようになる。

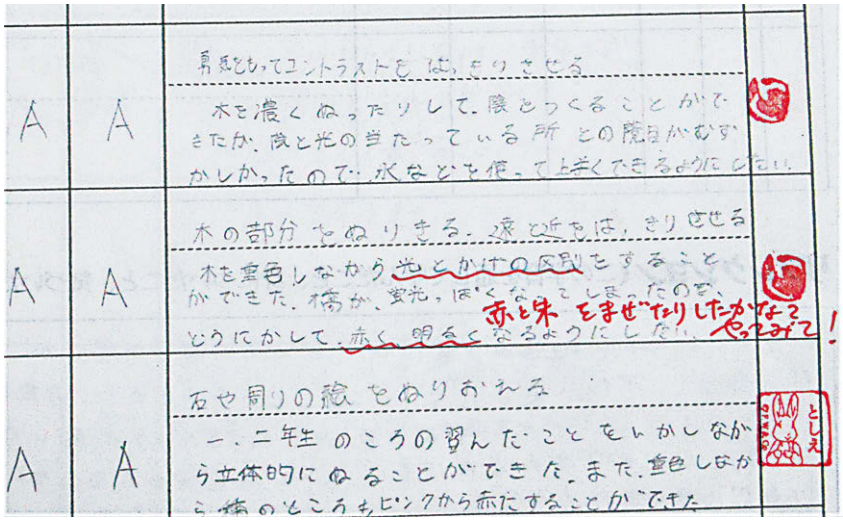
笑顔のあふれる楽しい授業にするよう心掛ける。

4

「うまくいかない」をチャンスと捉えよう

いいアイデアが浮かばない、表したい思いが高まっても思い通りに表現できないといった悩みを生徒の多くが経験します。その時こそ、粘り強く取り組ませ、解決に向かわせるチャンスと捉えましょう。具体的な参考資料を示したり、表現の基礎・基本を確認したりして乗り越える糸口をアドバイスします。授業の振り返り文などを活用して生徒の悩みを確認することもできます。

よりよいものを目指してあきらめずに取り組ませることで、粘り強く取り組む力や学習を調整しようとする力を育てます。



生徒の「振り返り文」から悩みを読み取り、適切なアドバイスをする。

5

作品を大切にしよう

一枚の画用紙も表現が加えられることによって、一つのかけがえのない作品になります。そうした思いを生徒に伝えながら、自分の作品はもちろん、互いのかけがえのない作品を大切にする約束をします。また、全員の作品を展示することで、上手な作品だけでなく、全ての作品が大切な作品であるという思いが伝わり、生徒の学習に向かう姿勢が真剣になります。

作品を大切にすることを通して、作品に取り組んだ自分の思いやそれまでの過程、さらに仲間と取り組んだ美術の時間を大切に考える心を育てます。

学年全員の作品を展示
「附学百五十八景」

全員の作品を鑑賞しながら互いの作品のよさを話し合う。

卒業制作として全員で制作したレリーフ「未来に残したいもの」

第 4 章

環境整備・教材研究

学習環境を考えることや日頃から教材研究を行う姿勢は、授業を形づくる大事な側面です。生徒の学習がより深まり、美術で学んでいることが生活や社会とつながっていると実感させることができます。

題材や単位時間の学習を準備するときに、広い視野で美術の学習内容や環境についても考えていきましょう。

1 美術室の環境を整えよう

生徒が美術室に入ったとき、心地よいと感じてもらえる環境をつくります。道具の置き場所のルールを決めたり、入室してから自席に着くまで効率よく準備や片付けができるようにしたりして、生徒と一緒に整理整頓する環境をつくりましょう。さらに、一人一人の机上の整理の仕方についても、制作中に互いの道具が妨げにならないようにルールを決めます。

このように環境を整えることで、生徒が授業により集中しやすくなります。

美術室の様子。

生徒が出し入れしやすいように棚の場所を工夫。

流し場の様子。

机のどこに何を置くのか机上整理のルールを決める。

2 校舎内に作品を展示しよう

生徒の制作意欲や行事に向かう気持ちを高めるために、制作途中の作品や完成した作品をタイミングよく校内に展示します。常に作品を鑑賞し合う環境をつくることで新たな制作意欲をもたせることにもなります。

また、校舎内の光の差す場所や暗い場所などを調べ、作品が引き立つ場所に展示しましょう。生徒の作品を丁寧に飾ることは、校舎内の落ち着いた雰囲気をつくり出します。学校を訪れた方々に生徒の頑張りを示すこともできます。

制作途中の作品を、参考にしたい点を示しながら展示。

体育祭に向けて、学級のよさを表現した「クラスマークデザイン」を展示。

暗い階段の踊り場に展示した「夢明かり」作品。

3

校外にも積極的に展示しよう

美術室や校舎内だけでなく、校外へも積極的に生徒作品を展示しましょう。題材のねらいを示した解説を添えて展示することで、中学校でどんな美術の学習をしているのか、地域の方々に紹介することができます。

また、目的をもって校外への展示を行うことで、生徒の学習意欲を高め、地域とのつながりを実感させることにつながります。

「被災地に希望を！」というコンセプトで制作した写真作品を各所で展示

学区にある商業施設での展示の様子。

被災地（宮古市役所）での展示の様子。

4

自分の引き出しを増やそう

美術館や博物館、研究会などに積極的に足を運び普段から教材研究に励みましょう。本物を見ることは刺激になります。そこで感じたすばらしさや感動した気持ちを生徒にも伝えることができます。また、地域の文化や芸術のよさについても調べてみましょう。地域のよさを題材に取り入れ、学習を通して生徒に感じ取らせることができます。

調べたことをそのまま伝えるだけでなく、生徒の新しい感覚と古くから伝わる文化のよさを結び付ける工夫を考えながら題材をデザインすることが大切です。

フランス・オランジュリー美術館でモネの「睡蓮」と。

授業研究会や作品研究会に参加して他の先生方から学ぶ。

地域の文化財について調べるため、県立博物館へ。

●教科の目標、各学年の目標及び内容の系統表（中学校美術科）

「知識・技能」に関する項目を青、「思考力、判断力、表現力等」に関する項目を黄、「学びに向かう力、人間性等」に関する項目を赤で　　示しています。また、学年ごとに違いがある文言は緑字で、筆者が重要だと思う文言は赤字で示しています。

教科の目標、各学年の目標及び内容と各学年の内容の取扱い

第1 目標			表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊か		に関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
	「知識及び技能」		(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、表現方法を創意工夫し、創造的に表すことが		できるようにする。
	「思考力、判断力、表現力等」		(2) 造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構		想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
	「学びに向かう力、人間性等」		(3) 美術の創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、心豊かな生活を創造してい		く態度を養い、豊かな情操を培う。
第2 各学年の目標及び内容	1 目標		〔第1学年〕		〔第2学年及び第3学年〕
		「知識及び技能」	(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、意図に応じて表現方法を工夫して表すことができるようにする。		(1) 対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに、意図に応じて自分の表現方法を追求し、創造的に表すことができるようにする。
		「思考力、判断力、表現力等」	(2) 自然の造形や美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図と工夫、機能性と美しさとの調和、美術の働きなどについて考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。		(2) 自然の造形や美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図と創造的な工夫、機能性と洗練された美しさとの調和、美術の働きなどについて独創的・総合的に考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
		「学びに向かう力、人間性等」	(3) 楽しく美術の活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を培い、心豊かな生活を創造していく態度を養う。		(3) 主体的に美術の活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を深め、心豊かな生活を創造していく態度を養う。
	2 内容		(1) 表現の活動を通して、次のとおり発想や構想に関する資質・能力を育成する。		(1) 表現の活動を通して、次のとおり発想や構想に関する資質・能力を育成する。
		A 表現 「思考力、判断力、表現力等」	ア 感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		ア 感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
			(ア) 対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること。		(ア) 対象や事象を深く見つめ感じ取ったことや考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、材料の組合せなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること。
			イ 伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		イ 伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
			(ア) 構成や装飾の目的や条件などを基に、対象の特徴や用いる場面などから主題を生み出し、美的感覚を働かせて調和のとれた美しさなどを考え、表現の構想を練ること。		(ア) 構成や装飾の目的や条件などを基に、用いる場面や環境、社会との関わりなどから主題を生み出し、美的感覚を働かせて調和のとれた洗練された美しさなどを総合的に考え、表現の構想を練ること。
			(イ) 伝える目的や条件などを基に、伝える相手や内容などから主題を生み出し、分かりやすさと美しさなどとの調和を考え、表現の構想を練ること。		(イ) 伝える目的や条件などを基に、伝える相手や内容、社会との関わりなどから主題を生み出し、伝達の効果と美しさなどとの調和を総合的に考え、表現の構想を練ること。
			(ウ) 使う目的や条件などを基に、使用する者の気持ち、材料などから主題を生み出し、使いやすさや機能と美しさなどとの調和を考え、表現の構想を練ること。		(ウ) 使う目的や条件などを基に、使用する者の立場、社会との関わり、機知やユーモアなどから主題を生み出し、使いやすさや機能と美しさなどとの調和を総合的に考え、表現の構想を練ること。
		「技能」	(2) 表現の活動を通して、次のとおり技能に関する資質・能力を育成する。		(2) 表現の活動を通して、次のとおり技能に関する資質・能力を育成する。
			ア 発想や構想をしたことなどを基に、表現する活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		ア 発想や構想をしたことなどを基に、表現する活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
			(ア) 材料や用具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表すこと。		(ア) 材料や用具の特性を生かし、意図に応じて自分の表現方法を追求して創造的に表すこと。
			(イ) 材料や用具の特性などから制作の順序などを考えながら、見通しをもって表すこと。		(イ) 材料や用具、表現方法の特性などから制作の順序などを総合的に考えながら、見通しをもって表すこと。
		B 鑑賞 「思考力、判断力、表現力等」	(1) 鑑賞の活動を通して、次のとおり鑑賞に関する資質・能力を育成する。		(1) 鑑賞の活動を通して、次のとおり鑑賞に関する資質・能力を育成する。
			ア 美術作品などの見方や感じ方を広げる活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		ア 美術作品などの見方や感じ方を深める活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
			(ア) 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げること。		(ア) 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めること。
			(イ) 目的や機能との調和のとれた美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げること。		(イ) 目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めること。
			イ 生活の中の美術の働きや美術文化についての見方や感じ方を広げる活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		イ 生活や社会の中の美術の働きや美術文化についての見方や感じ方を深める活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。
			(ア) 身の回りにある自然物や人工物の形や色彩、材料などの造形的な美しさなどを感じ取り、生活を美しく豊かにする美術の働きについて考えるなどして、見方や感じ方を広げること。		(ア) 身近な環境の中に見られる造形的な美しさなどを感じ取り、安らぎや自然との共生などの視点から生活や社会を美しく豊かにする美術の働きについて考えるなどして、見方や感じ方を深めること。
			(イ) 身近な地域や日本及び諸外国の文化遺産などのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化について考えるなどして、見方や感じ方を広げること。		(イ) 日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気付き、美術を通した国際理解や美術文化の継承と創造について考えるなどして、見方や感じ方を深めること。
		〔共通事項〕 「知識」	(1)「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。		(1)「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
			ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること。		ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること。
			イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。		イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。
	3 内容の取扱い		(1) 第1学年では、内容に示す各事項の定着を図ることを基本とし、一年間で全ての内容が学習できるように一題材に充てる時間数などについて十分検討すること。		(1) 第2学年及び第3学年では、第1学年において身に付けた資質・能力を柔軟に活用して、表現及び鑑賞に関する資質・能力をより豊かに高めることを基本とし、第2学年と第3学年の発達の特性を考慮して内容の選択や一題材に充てる時間数などについて十分検討すること。
			(2)「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導に当たっては、発想や構想に関する資質・能力や鑑賞に関する資質・能力を育成する観点から、〔共通事項〕に示す事項を視点に、アイデアスケッチで構想を練ったり、言葉で考えを整理したりすることや、作品などについて説明し合うなどして対象の見方や感じ方を広げるなどの言語活動の充実を図ること。		(2)「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導に当たっては、発想や構想に関する資質・能力や鑑賞に関する資質・能力を育成する観点から、〔共通事項〕に示す事項を視点に、アイデアスケッチで構想を練ったり、言葉で考えを整理したりすることや、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして対象の見方や感じ方を深めるなどの言語活動の充実を図ること。
					(3)「B 鑑賞」のイの（イ）の指導に当たっては、日本の美術の概括的な変遷などを捉えることを通して、各時代における作品の特質、人々の感じ方や考え方、願いなどを感じ取ることができるよう配慮すること。

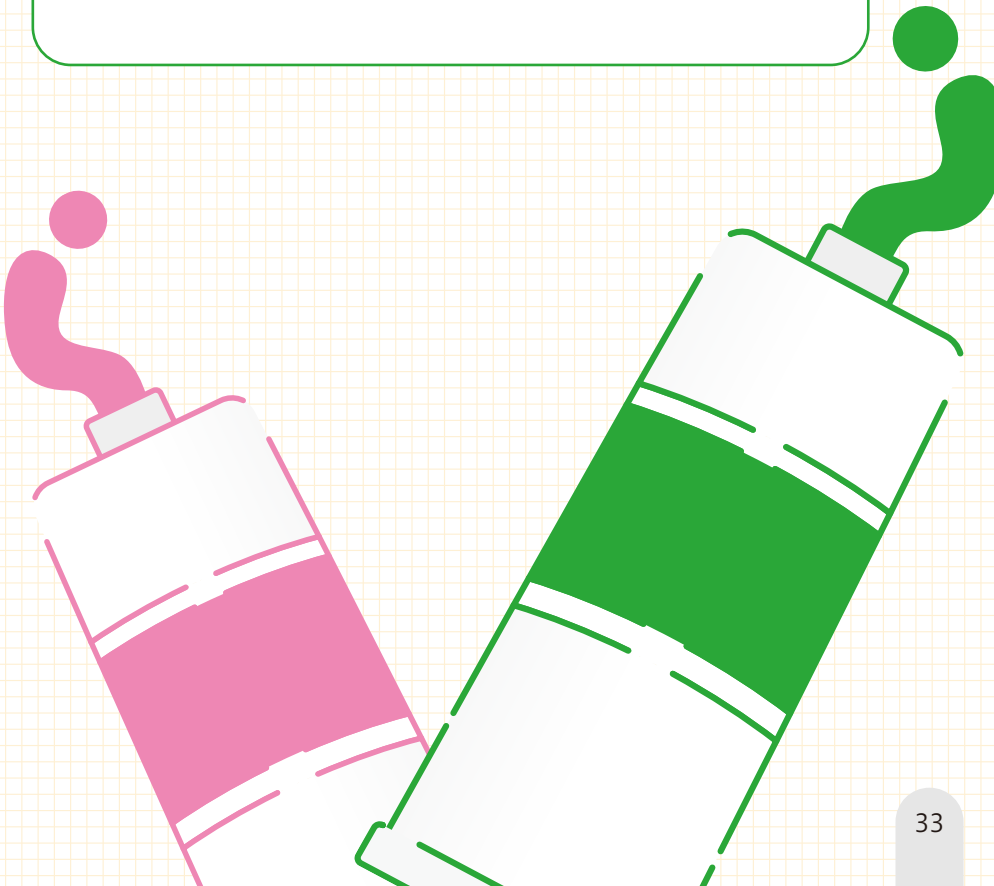
指導計画の作成と内容の取扱い

第３　指導計画の作成と内容の取扱い
１　指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。
（1）題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、造形的な見方・考え方を働かせ、**表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実**を図ること。
（2）第２の各学年の内容の「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導については相互に関連を図り、特に発想や構想に関する資質・能力と鑑賞に関する資質・能力とを総合的に働かせて学習が深められるようにすること。
（3）第２の各学年の内容の**（共通事項）は、表現及び鑑賞の学習において共通に必要となる資質・能力**であり、「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導と併せて、十分な指導が行われるよう工夫すること。
（4）第２の各学年の内容の「A 表現」については、（1）のア及びイと、（2）は原則として関連付けて行い、**（1）のア及びイそれぞれにおいて描く活動とつくる活動のいずれも経験させるようにすること**。その際、第２学年及び第３学年の各学年においては、（1）のア及びイそれぞれにおいて、描く活動とつくる活動のいずれかを選択して扱うことができることとし、２学年間を通して描く活動とつくる活動が調和的に行えるようにすること。
（5）第２の内容の**「B 鑑賞」の指導**については、各学年とも、各事項において育成を目指す資質・能力の定着が図られるよう、**適切かつ十分な授業時数を確保**すること。
（6）障害のある生徒などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。
（7）第１章総則の第１の２の（2）に示す道徳教育の目標に基づき、道徳科などとの関連を考慮しながら、第３章特別の教科道徳の第２に示す内容について、美術科の特質に応じて適切な指導をすること。
２　第２の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。
（1）〔共通事項〕の指導に当たっては、生徒が造形を豊かに捉える多様な視点をもてるように、以下の内容について配慮すること。
ア　〔共通事項〕のアの指導に当たっては、造形の要素などに着目して、次の事項を**実感的に理解できるようにする**こと。 （ア）色彩の色味や明るさ、鮮やかさを捉えること。 （イ）材料の性質や質感を捉えること。 （ウ）形や色彩、材料、光などから感じる優しさや楽しさ、寂しさなどを捉えること。 （エ）形や色彩などの組合せによる構成の美しさを捉えること。 （オ）余白や空間の効果、立体感や遠近感、量感や動勢などを捉えること。
イ　〔共通事項〕のイの指導に当たっては、全体のイメージや作風などに着目して、次の事項を実感的に理解できるようにすること。 （ア）造形的な特徴などを基に、見立てたり、心情などと関連付けたりして全体のイメージで捉えること。 （イ）造形的な特徴などを基に、作風や様式などの文化的な視点で捉えること。
（2）各学年の「A 表現」の指導に当たっては、主題を生み出すことから表現の確認及び完成に至る全過程を通して、生徒が夢と目標をもち、自分のよさを発見し喜びをもって自己実現を果たしていく態度の形成を図るようにすること。
（3）各学年の「A 表現」の指導に当たっては、生徒の学習経験や資質・能力、発達の特性等の実態を踏まえ、生徒が自分の表現意図に合う表現形式や技法、材料などを選択し創意工夫して表現できるように、次の事項に配慮すること。 ア　見る力や感じ取る力、考える力、描く力などを育成するために、**スケッチの学習を効果的に取り入れる**ようにすること。 イ　美術の表現の可能性を広げるために、写真・ビデオ・コンピュータ等の**映像メディアの積極的な活用**を図るようにすること。 ウ　日本及び諸外国の作品の独特な表現形式、漫画やイラストレーション、図などの**多様な表現方法を活用**できるようにすること。 エ　表現の材料や題材などについては、**地域の身近なものや伝統的なものも取り上げる**ようにすること。
（4）各活動において、互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにすること。
（5）互いの個性を生かし合い協力して創造する喜びを味わわせるため、適切な機会を選び**共同で行う創造活動を経験させる**こと。
（6）各学年の「B 鑑賞」の題材については、国内外の児童生徒の作品、我が国を含むアジアの文化遺産についても取り上げるとともに、**美術館や博物館等と連携を図ったり、それらの施設や文化財などを積極的に活用**したりするようにすること。
（7）創造することの価値を捉え、自己や他者の作品などに表れている創造性を尊重する態度の形成を図るとともに、必要に応じて、**美術に関する知的財産権や肖像権などについて触れる**ようにすること。また、こうした態度の形成が、美術文化の継承、発展、創造を支えていることへの理解につながるよう配慮すること。
３　事故防止のため、特に、刃物類、塗料、器具などの使い方の指導と保管、活動場所における安全指導などを徹底するものとする。
４　学校における鑑賞のための環境づくりをするに当たっては、次の事項に配慮するものとする。
（1）生徒が造形的な視点を豊かにもつことができるよう、生徒や学校の実態に応じて、学校図書館等における**鑑賞用図書、映像資料等の活用**を図ること。
（2）生徒が鑑賞に親しむことができるよう、**校内の適切な場所に鑑賞作品などを展示**するとともに、学校や地域の実態に応じて、**校外においても生徒作品などの展示**の機会を設けるなどすること。

「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　美術編」をもとに作成。

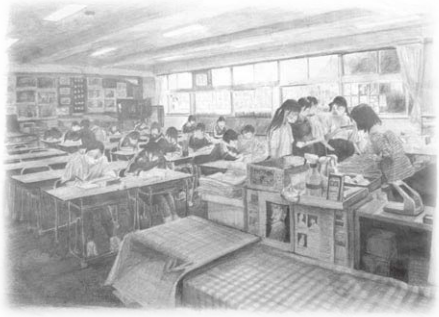
おわりに

自分の感覚や心で直接感じること、「すばらしい」や「美しい」と感じること、感じたことを自分の頭や体をフル回転させて表現すること、互いのすばらしさを認め合うこと、こうした体験ができる美術の時間は、とても幸せな時間です。



佐々木 俊江　盛岡市立下橋中学校　指導教諭

岩手県奥州市出身。岩手大学教育学部中学校教員養成課程美術科卒業。大船渡市立綾里小学校、紫波町立紫波第一中学校、岩泉町立小川中学校、雫石町立雫石中学校、岩手大学教育学部附属中学校、宮古市立宮古西中学校、盛岡市立下橋中学校勤務。平成29年の中学校美術学習指導要領改訂に携わる。



美術教師ハンドブック

日文教授用資料［中学校美術］
令和5年（2023年）12月27日発行

編集・発行人　佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33660

日本文教出版株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大 阪 本 社　〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171

東 京 本 社　〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618

九 州 支 社　〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938

東 海 支 社　〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F-B
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690